

別紙 4

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 自己表現行動に関わる心理社会的規定要因の研究

氏 名 安藤 有美

論 文 内 容 の 要 旨

良好な人間関係を促進するものとして、世間一般での“アサーション”の認知度は高い。アサーションとは自分も他者も大切にしたい自己表現とされ、自己表現の改善を目指したアサーショントレーニングは、教育機関や女性センターなどの多様な現場で実践されている。しかしながら、アサーションにおける基礎的研究は少なく、心理学のエビデンスに基づく実践マニュアルが確立されているとは言えない。また、実践効果の検証についても十分な検討がなされていないのが現状である。

本論文は、アサーションに関わる心理社会的要因の影響を検討することで、高い効果が期待される実践活動でのアプローチ方法を模索し、実践と効果検証までを行った。そのために、共通する定義が存在しないとされるアサーションについては、自己表現における自己表現性と捉え、その行動的側面に着目し検討を行った。これ

は、自己表現における表出の違いにより区別される行動形態を扱い、その選択頻度に関わる要因との関連を明確にすることで、アサーションを理解し、実践活動に役立てようとするものである。

本論文の構成は、7章からなる。まず、第1章、第2章は、アサーションにおける行動形態と、これに関わる心理社会的要因との関連を概観した。第3章、第4章は、個人の自己表現の在り方について、特定場面における行動形態を選択頻度で捉え、これに影響を及ぼしている場面要因と個人内要因との関連を検討した。第5章は、これまでの実証的検討を踏まえ、効果が期待される介入を実践し、その介入効果の検証を行った。第6章、第7章は、こうした取り組みを行うことにより、不明瞭とされたアサーション概念における一つの捉え方を提案した。加えて、自己表現行動の改善を目指す実践活動の可能性と、今後の課題について論じた。

第1章では、1960年代のアメリカで誕生したアサーション概念に則り、行動パターンや言語パターン、口調や非言語的行動や、行動の結果などにより区別される、いくつかの行動形態を、その固有の特徴により概括した。さらに、自己表現を行う際に、選択される行動形態が、いかなる要因による影響を受けるのかについて、場面要因と個人内要因を取り上げ、研究知見を概観した。

第2章では、個人の認知能力を高め、適切な対人行動を促すものとされる視点取得能力について、その発達過程や社会的行動との関連について検討された研究知見を概観した。また、視点取得能力への介入を扱った実践的取組みを踏まえ、視点取得能力の向上により導出される、自己表現行動の改善の可能性について述べた。

第3章では、大学生が友人との相互作用の中で、どのような自己表現を行ってい

るのかについて調査した。調査は、仮想的対人場面を用いた質問紙を配布し、提示場面に遭遇した際の自己表現を自由記述データで収集し、表出の仕方により分類することで、5つの行動形態（アサーティブ、攻撃的、非主張的、間接的、短絡的）を抽出した。さらに、異なる場面要因による影響を検討するため、場面と行動形態の選択頻度との関連を検討したところ、対話者との関係性と、場面における自己主張の必要性の高低といった場面要因の違いにより、選択されやすい行動形態が異なることが明らかにされた。

第4章では、自己表現に及ぼす個人内要因による影響を検討するため、行動形態と4つの個人内要因（攻撃性、対人不安、公的自意識、共感性）との関連を検討した。その結果、場面要因による強い影響を受けながらも、個人内要因の高低により行動形態の選択頻度に違いがみられた。これにより、自己表現は高い場面依存性を持ちながらも、表出者の個人内要因により、選択されやすい行動形態が異なることが明らかとなった。このことより、選択されやすい自己表現とは、場面への適合性や個人内要因が関わり、さらに、表出者の自己表現の意味や必要性、目的によっても違いがみられることがうかがわれた。

第5章では、これまでの検討を踏まえた介入を実施し、その効果検証を行った。介入方法としては、個人の認知能力の高まりを促すことによる自己表現の改善を目的とした。認知能力としては、自己表現との関連が指摘される視点取得能力を用いることとし、視点取得能力が一般よりも低次の段階にあるとされる非行少年を対象とした。その結果、介入後は視点取得能力が向上し、自己表現行動についても適応的な変化が認められ、視点取得能力の向上を目指す教育的介入の効果が検証された。

第6章では、抽出された行動形態について、行動形態間の関係性と特徴を整理し、先行知見を踏まえたアサーション概念の捉え方の一案を理論化した。また、視点取

得能力の向上プログラムの介入によりもたらされた効果と意義を示した。

第7章では、アサーションを行動形態で捉えることの問題点と今後の課題を論じた。また、実践活動の成果を踏まえ、教育現場での応用可能性と、今後の展望について論じた。

この一連の研究により、自己表現の表出に及ぼす心理社会的要因の影響が明らかとなった。そして、これを踏まえ、視点取得能力に焦点づけた実践を実施した結果、自己表現行動の改善がみられ、認知的アプローチによる行動的な適応変化への寄与が確認された。これは認知能力の向上自体が、個人の思考の形態や思考パターンという根源的な変化を意味するものであり、特定場面に制限されることなく、日常生活における判断や行動面での変化をもたらすことと関連したと考えられた。以上より、場面によって適切な表出方法が異なる自己表現を扱う場合、個人の認知能力の向上をターゲットとする介入が、適応的变化を導く上で有効であることが示された。

本研究の取り組みは、従来のスキル獲得型のトレーニングプログラムでなく、個人の認知能力の育成を促すことによる行動変化を検証したものとして、新たな試みであった。これは、自己表現行動の場面依存性の高さに対応したものであり、実践活動の効果が、場面の特殊性に制限されることなく、日常生活への般化が期待される点で意義深いことであった。また、単なる道具的なスキルとして自己表現行動を獲得することは、一見、他者を欺いたり、操作するためのテクニックに陥りやすい危険性がある。こうした問題を回避する上でも、認知的アプローチによる有用性は高かった。さらに、先人たちの努力により獲得されたアサーション権に尊敬の念を示し、アサーション概念の基本理念である自他の相互尊重の考え方に従う形での実践活動として、重要な取り組みであったと考えられる。